

特集 第8回『言語力』大賞コンテスト

第8回弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

I：文学作品部門（ジャンルは自由） ＊応募総数 19 点

大賞	人文学部 2 年	齋藤 拓	「老境の鬼」
佳作	人文学部 1 年	柳谷 志穂	「あいことば」
〃	人文学部 4 年	清水 卓馬	「食前対話」
〃	人文学部 3 年	佐藤 里穂	「光芒」
〃	教育学部 2 年	新屋 祐莉	「ロボットは廃団地で泣かない」

II：テーマ部門（テーマ「災害復興」） ＊応募総数 6 点

大賞	人文学部 1 年	藤田 雄大	「語りがもたらす復興」
優秀賞	人文学部 4 年	土田 千愛	「仮設住宅から」
佳作	農学生命科学部 3 年	名取 史晃	「復興と新興」
〃	人文学部 4 年	川村 啓嘉	「個人の防災意識と復興」

★受賞作品公開★<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/>

大賞受賞者の声

「伝える場」としての言語力大賞コンテスト

第8回言語力大賞 大賞受賞 人文学部 2 年 齋藤 拓



私が言語力大賞に応募しようと思ったきっかけは、過去に大賞を受賞した三浦元義先輩の勧めで、文芸部で志を同じくする同学年の二人と去年そろって応募しました。一人が入選したものの、自分は選に漏れるという結果になり悔しさを覚えたのですが、彼の作品を読むと確かに驚嘆、納得せずにはいられませんでした。4,000 字という限られた字数の中でどれだけ物語を充実させ、かつ自分なりの色を出すことにおいて自分は他の作品にかなわなかったことを悟りました。すると三浦先輩に、「自分の作品は、郷土色を評価してもらったことにあったと思う」とのアドバイスをいただきました。そこから私は自分が生まれ育った岩手北上への郷土愛を全面的に押し出してみようと思い立ち、今回受賞の運びとなった作品を書くに至りました。「原体剣舞連」を下敷きにして、宮沢賢

治へのオマージュとしましたが、やはりいつかは誰かの作品によることのない、自分が考えた胸を張って言える作品を書いてみたいと思っています。そのために、やはり今は数多くの作品に触れ、それらを吸収して自分なりに紡いでみるのが、これからこのコンテストへの応募を考えている人々にも大切だと私は考えます。

続いて、昨年今年とコンテストに応募して思った点を挙げるとするならば、字数の規定を明確に定めることだと思います。授賞式の際に長谷川成一図書館長が「字数制限を出す作品もあった」とコメントし、4,000 字程度とは私は疑問でした。小論文のテストなどでは規定の 1 割前後が一般とされているので、おそらく 3,600 から 4,400 字が良いのではないのでしょうか。800 字の開きは、短編を競うならば一人一人の腕の冴えがさらに顕著

に見えるものになると思います。

終わりに、コンテストを開催した図書館と審査員の方々、三浦先輩、ひそやかなライバル意識をくれた文芸部の同輩に感謝の意を表すとともに筆

を置かせていただきます。

私のようにコメントを書くべくバックナンバーを読んでいる未来の大賞受賞者の君も、おめでとう。これからも頑張る。

(さいとう たく)

受賞にあたって

第8回言語力大賞 大賞受賞 人文学部1年 藤田 雄大



この度の受賞を、本当に嬉しく思います。

震災はまだ終わってはいない。この事実を何らかの形で伝えたいと思っていた矢先、本コンテストのことを知りました。「災害復興」というテーマは、自身が携わってきたボランティア活動と、被災地で得られた語りを関連付けて論を展開しやすいのでは、と考えたのが応募のきっかけです。勿論、論を展開するにはかなりの労力を伴うこととなったのですが…

受賞の連絡を受け、改めて自身の文章を読み直してみました。自信を持って言えることは、題材として選んだ語りは偶然得られたものではないということです。何度も現地へ赴き、地道に活動を継続した結果、“必然的に”臨場感に溢れる衝撃的な語りが得られたのだと自負しています。しかしながら、文章の表現にはまだまだ稚拙な部分が多く、特に文末の表現については統一感がない印象を受けます。思い返せば、文章が仕上がったのが締め切り当日の午前中で、じっくり時間をかけて推敲することが出来ませんでした。加えて、自身の論を強めるために参考文献を探し、引用する時

間が無かったことも悔やまれます。締め切りに間に合わせるだけではなく、期間を逆算してスケジュールを管理を行うこと。そして、自身の文章を時間をかけて見直し、論の精度を上げる必要性を感じました。

本コンテストについての感想ですが、テーマ部門への応募が少ないことが気になります。先日、弘大生協主催の読書会に参加した際にも、小説を紹介する人は多かったのですが、評論や専門書を紹介する人はごく僅かでした。このことから、最近の大学生は読み物としても書き物としても小説を好む傾向があるのではないかと推測しています。勿論それは悪いことではありません。ただ、実社会に埋め込まれた文脈を読み取り、自身の言葉で明らかにしていく過程も面白く、刺激的だと、私は思うのです。

今世界で何が起きているのか明らかにしたい。この世界を理解したい。抱えた想いを胸に、これからも精進していきます。ありがとうございました。

(ふじた ゆうだい)

審査委員から

言語力大賞の審査を終えて

第8回言語力大賞審査委員 人文学部准教授 長谷河 亜希子



今年度、初めて審査に加わりましたが、読み終わってしみりとさせられる作品もあれば、くすっと笑えるような作品、さらには、若さゆえの葛藤が伺われるような作品や、いろいろと考えさせられる作品と、さまざまなタイプの作品があり、楽しく読むことができました。今後の課題は、応募作品数の増加だと思います。作品応募の呼びかけに関しては、教員の方々の更なるご協力を得て、授業やゼミでのビラまきなど、より広く宣伝活動をする必要があるのではないのでしょうか。また、

応募者の皆さんには、より推敲を重ね、無駄を極限までそぎ落とした濃密な作品の応募が増えることを期待します。例えば、テーマ部門の作品、とりわけ論文的な作品であれば、まずは字数制限の倍程度の字数で書き、それを縮めていくといった作業を繰り返していくうちに、言葉に対する感覚が次第に鋭敏になり、文章に磨きがかかると同時に内容も凝縮され、読み手に4000字という短さを感じさせない作品となっていくのではないのでしょうか。

(はせがわ あきこ)

弘前大学生の「言語力」

第8回言語力大賞審査委員 教育学部教授 郡 千寿子



弘前大学附属図書館主催の言語力コンテストの審査委員としての経験をふまえて、学生の言語力についての感想を少し率直に記してみたい。以前は評論部門に応募が少なかったが、今回は6本の応募があった。論理的な文章構成能力に自信がない学生が多いと感じていたが、震災の影響もあってか、自分の問題として「災害復興」を真剣に捉え、思考した評論が多かったことは大変喜ばしい。批評や評論に苦手意識をもつ学生が多い現状において、今後も果敢にこうした挑戦を続けてほしいと願っている。

一方の創作については意欲作が多く、応募数も年々増加している。小説といった創作活動につい

ては、能力や意欲を秘めた学生が多いことの現れであるだろう。学生からの要望には「この賞をもっと周知宣伝してほしい」とある。機会があれば、学生たちは自らすすんでその創造性を広げ、言語能力を切磋琢磨しよう、と思っているらしい。学生たちの言語能力は、やはり自分だけではなかなか磨けないものなのかもしれない。

若い彼らならではの発想に満ちた、多くの作品に触れ、審査委員が元気づけられたことは確かであった。そして学生の秘めたる力に触れ希望も感じた。今後ますます活躍してくれる学生が増えることを期待している。

(こおり ちずこ)

「言語力」大賞コンテストの審査員を務めて

第8回言語力大賞審査委員 農学生命科学部教授 荒川 修

今回初めて『言語力』大賞コンテストの審査員を務めたが、大変難しく悩み多い任務だった。これから応募する学生のためにも審査視点について述べたい。

テーマ部門のテーマは「震災復興」だった。やはり経験に基づいた作品に力強さを感じたが、震災復興に対する著者の考えが良くまとめられて、訴える力があるかどうかを評価の基準とし、初めて審査をするにしても比較的審査はやりやすかった。一方、文学作品部門の方は何を基準に審査したら良いのか大変困った。結局その作品が何を主題として書かれていて、何を伝えようとしているのかが強く読者に伝わってくるかどうかを評価基

準として審査を行った。小説はほとんど読まないが、良い小説と言うのは読む人に何か感動やインスピレーションを与えるものではないだろうか。いくつかの作品がありがちな設定やどこかで読んだことがあるような話であったのは残念に思えた。若い人にはもっと独自の発想やスタイルがあっても良いのではないかと思う。選にもれたとしてもそれはその作品が悪いわけではなく、審査員の価値判断に合わないだけかもしれない。今はいろんなメディアで自分の作品を公表出来る時代である。沢山読んで沢山良い作品を創作して欲しい。さらなるチャレンジに期待したい。

(あらかわ おさむ)

「ことば」の力

第8回言語力大賞審査委員 農学生命科学部准教授 本多 和茂



書き言葉においても話し言葉においても、「ことば」には私たちが日常思う以上に力があり、時としてその力は人を元気にしたり、勇気づけたりあるいは癒したり、大きな力を発揮するものであると、審査員を担当して再認識したように感じています。

日常生活での会話やメールあるいは講義・ゼミ、会議、論文など、言語を用いる多くの機会があり、その中で「ことば」の力をしっかり活用できているだろうか？一方で、「ことば」の暴力や最近では「ことば」のDVなど耳にすることもあります。いじめの問題でも「ことば」が大きな力を持ち、そ

れがこの場合は負に作用しているのではないのでしょうか？

「ことば」は（良くも悪くも）大きな力を持ったもの。古くから日本には言霊信仰というのがありますね。この「ことば」を大切にし、その力を良い方に向けていくことで様々な問題を解決できる可能性があるのでは？改めてそのことを意識し、日常から取り組むことが出来ればと思います。「言語力大賞コンテスト」が、応募者はもちろん他の弘大生にとっても、「ことば」の力を発揮する、また考えるための良い契機になればと願い、今後も益々充実していくことを望んでいます。

(ほんだ かずしげ)